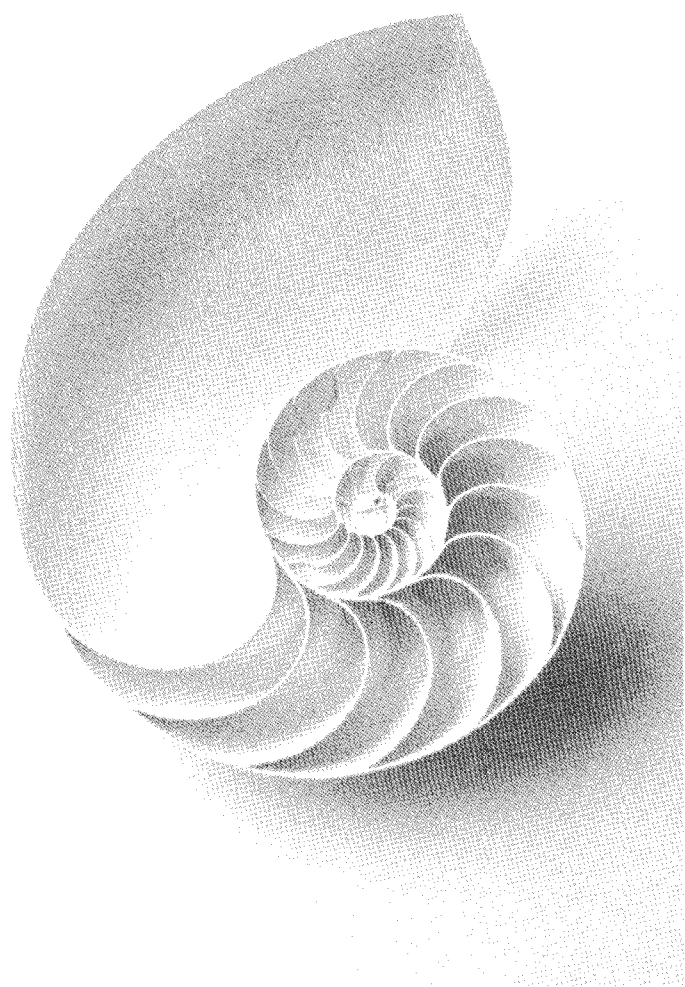
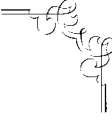
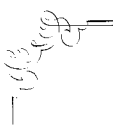


第5回
文窓賞優秀作品集



2011年10月発行

文窓会
神戸大学文学部同窓会



第5回 文窓賞 学生レポートコンテスト 結果

最優秀賞

該当者なし

優秀賞

「日本人の美德」

高橋 花菜（英米文学専修四回生）

「夢からできた夢、アメリカでのディベート部員生活」

隅野 友加里（英米文学専修四回生）

「四年間の大学生活、次へのステップ」

森下 絵理香（日本史学専修四回生）

「人を理解すること、人とわかり合うこと」

近石 塁（哲学専修四回生）

佳作

「クリエイティブな毎日」

姉川 拓生（米英文学専修二回生）

「少年老い易く学成り難し」

酒井 友樹（人文学科一回生）

審査委員長特別賞

「今、自然とは」

日比野 有真（フランス文学専修四回生）

優秀賞

日本人の美德

英米文学専修 四回生

高橋 花菜

ピンポンパンボーン。"May I have your attention, please? American Airline 437 for Los Angeles..."

うん、このにおい。アメリカだ、帰ってきた。空港に降りたとき、まず一番にそう思った。どうやら記憶というのは、頭よりもなによりも、感覚で覚えているらしい。6年以上も前にかいだにおいを思い出し、あの時の興奮とこれからの期待で、胸がぞくぞくした。1年前の夏、わたしはかねてからの目標であった留学のために、アメリカへと飛び立ったのであった。

わたしが留学したいと思い始めたきっかけは2つある。1つ目は、わたしの母が英語の教師であることだ。小さい頃から母の英会話について行ったり、一緒に英語の勉強をしたりと、英語というのはとても身近な存在であった。自分の中で英語というのは、数学や理科など他の科目のように、受験のために勉強しなければいけない、もしくは勉強させられている、といった存在ではない。一生付き合っていける、限りなく趣味に近いものなのである。そのため、母のように教師にならなくても、もっと英語を学んでいたいという気持ちがあった。

2つ目のきっかけは、中学生の頃に参加した自治体主催のアメリカ研修旅行だ。初めての海外。初めての子どもたちだけ（もちろん自治体職員の方は数名いたが）の旅行。行き先は世界一の大都市マンハッタン、ニューヨーク。楽しくないはずがあるだろうか。当時、東京ましてや大阪にすら行ったことのなかった香川の田舎娘に感動を与えるには、十分すぎるほどの体験であった。高層ビルや人の多さ、日本ではなかなか見られないギリシア建築の建物、映画に出てくるような街並み。しかしわたしがアメリカに魅了された理由はそれだけではない。その1週間の旅行中に、3日間だけアメリカ人の家庭にホームステイし、学校にも連れて行ってもらったのだが、そこで全くと言っていいほど、自分の英語が通じないのである。中学生で習う英語なんてたかが知れているが、その簡単な単語ですら聞き取ってもらえなかった。当時、小さい頃から英会話に行っていたこともあり、少しだけ英語には自信があったので、とてつ

もないショックを受けたのを覚えている。それと同時に、今のままではダメなんだ、絶対にまた戻ってきてリベンジしてやる、というやる気に火がついたのである。それからアメリカ留学というのは、わたしの目標となった。

しかしなぜ大学3回生の夏、という就職活動も始めなければいけない中途半端な時期を選んだのかというと、それにはわたしの中での変化に理由がある。上でも少し触れたように、わたしは香川県の中でも特に田舎の方の出身である。田舎と聞いてみんな想像するように、わたしの地元では地域の繋がりがとても強い。道ですれ違えば知らないおばあちゃんにも挨拶するし、誰かが学校で悪いことをするとすぐにご近所さんに広まってしまう。野菜が多く取れば隣のお家におすそ分けに行くし、スーパーに出かければ母は話し込んでしまって、1時間は帰ってこない。そんなコミュニティで育ったせいか、大学生になって神戸に出てきたとき、みんな何かしらせかせかしているし、他人にも関心がないのかなあという印象を一番に受けた。そしてその頃は特に、SNSが普及し始めた時代だったのだろう。電車やバスの中、更には歩行中、少しでも空き時間があるとみんな携帯の画面を見つめ、他人とのコミュニケーションはもっぱら携帯を通して、という時代になってしまった。昔なら、電車の中で隣同士に座った人たちの間での会話もうあったかもしれないが、現代ではそんなこと考えられない。また、プライバシーの保護や子どもの安全が叫ばれている時代で、安易に知らない人に声をかけることも出来なくなってしまった。このように、人との繋がりがどんどん希薄になっていって寂しいと思うと同時に、現代の日本人はこのままでいいのだろうかという疑問が、わたしの中でどんどん生じてきたのである。そんなときに思い出したのが、中学の時に触れた、アメリカ人の気さくさ、陽気さ、フレンドリーさである。果たして今でも彼らはそうなのだろうか。彼らも変わってしまったのだろうか。うん、それなら行って確かめるしかない！嘘のようだが、本当に突拍子もなくそう思っ

たのである。

前置きが長くなってしまったが、そういうわけで6年半ぶりにわたしはアメリカに戻ってきた。今回は英語にもっと触れていたいという思いと、アメリカ人の生活や人間性が見られるだろうという考えから、1年間という長期間であるがホームステイをすることを選択した。両親は、もしステイ先が変な人たちだったら…と心配し、初めは反対していたが、結果的にみて、わたしの選択は正解だったと思う。わたしは素晴らしい人たちに囲まれ、素晴らしい経験をたくさんしたと胸をはって言える。

一概には言えないが、少なくともわたしが出会ったアメリカ人は、みんな日本人のわたしにフレンドリーに話しかけてくれ、この拙い英語も全力で理解しようとしてくれた。中学生当時感じたアメリカ人の人間性は健在だったのである。しかし、アメリカでの生活も数ヶ月がたった頃から、徐々に感じ始めたことがある。よくアメリカ人はインデペンデントだと言われることが多いが、まさにその通りなのである。良く言えば、自分の考えをちゃんと持ち個人個人が自立しているのだが、悪く言えば、自分第一主義で、相手の気持ちよりも自分を優先する傾向があるのだ。その性格も、はっきりしていて逆に気持ちが良いのだが、相手の気持ちを考えなさい、自分がされて嫌なことは相手にもしちゃだめ、と教わって育った日本人のわたしには、戸惑う場面が多々あった。

例えば、友達からの「今日ディナーに行こうよ。」というメールを休日の昼間に受け取ったとする。しかし部屋着で一日中ごろごろしていたため、今からお化粧したり着替えたりと用意をして出かけるのはめんどくさい。出来れば断りたい。このような状況で、日本人ならどう返信するだろうか。多くの人が断るために、何かと理由をでっち上げるのではないだろうか。わたしの場合も、今日はちょっと体調が悪いから今度にしよう、という返答をした。もちろん体調は万全でピンピンしていたのだが。しかしアメリカ人のホストには、行きたくないならただ「今日は行けない」と言えばいいのに、なぜ理由なんていちいち言わないといけないのか、それじゃ相手にただ嘘をついているだけじゃないか、と言われた。わたしたち日本人は、何か断る正当な理由がなければ、相手に嫌な思いをさせてしまうのではないか、ということが一番を考えてしまうが、彼らはどうやらそうでないのである。

このように、アメリカ人と仲良くなってもほんとにそれでいいの？そっけないなあと思うことが度々あった。

そんな中、2011年3月11日。朝、起きるとリビングが大騒ぎだった。「カナ、テレビ！日本が大変なことになってるよ！」と。それから数時間、ファミリーみんなでテレビに釘付けだった。地割れ、建物崩壊、逃げる人々、それから津波。目からは自然と涙が流れた。それはあまりにも信じられない光景で、まるで映画のワンシーンを見ているようだった。アメリカのニュースも1日中それについての報道ばかりだった。初めは、建物や街の被害の様子ばかりが報道されていたのだが、徐々にそれが避難している人々の様子に替わるようになる。その様子に、わたしをはじめ、アメリカ人までもが衝撃を受けた。あれだけの惨事があった中、人々は平然と列を作って配給所に並んでいるのである。避難所である体育館の中でも、誰一人騒ぎ立てる人はおらず、布団を並べて敷き、おにぎり一つを持ってじっと座っているのである。そして棚も商品もめちゃくちゃになったスーパーやコンビニでは、略奪など起こらず、みんな列に並びレジを待っているのである。そしてアメリカ人は口をそろえて、こんなこと自分たちには不可能だろう、と言った。

しかし日がたつにつれ、テレビを見てもただただ辛くなるばかりで、何か役に立ちたいのに、こんな遠くの地から自分に出来ることはあるのだろうかというもどかしい気持ちで胸がいっぱいだった。そんな時、日本人の友達からサンディエゴの日本人コミュニティで被災地のためにチャリティコンサートをやるらしいからそれを手伝ってみないか、という誘いを受けた。サンディエゴはカリフォルニアのそれほど大きくない町なので、ボランティアといってもそこまで規模の大きいものではないだろうと思っていたのだが、いざ指定された場所へと着いて驚くこととなる。コンサートには20組を超えるグループが出演し、和太鼓やよさこいの日本人主体のグループはもちろん、半分ほどは外国人のシンガーやダンスグループだったのである。学生からおじいさんまで、参加者の年代も様々であった。わたしは出演者に舞台裏を案内するという役目だったのだが、外国人はみんな口を揃えて、「日本は素晴らしい国だ。ニュースを見て感銘を受けた。日本のために何か出来ることをしたい。」と言うのだった。もちろん日本人も、スタッフや出演者を含め全員が、何か自分に出来ることはないかともどかしい気持ちを抱えていた時だったので、今回こういう形で関わることが嬉しいと言っていた。たくさんの人が会場内に置いてあるいくつかの募金箱の前で立ち止まって支援の気持ちを表したり、壁にかけてある日本国旗に励ましの言葉を書き込んだりしていた。

そしてみんな「がんばる日本」[pray for Japan]

と書かれたTシャツやリストバンドを身につけ、出演者もスタッフも一体となった素晴らしいステージが出来上がった。全ての演目の最後に、出演者やスタッフ、そして観客全員で合唱した『上を向いて歩こう』。その光景はすごく感動するものであった。

～上を向いて 歩こう 涙が こぼれないように～

そのボランティアでわたしは1人の日本人留学生に出会った。彼女の出身は岩手県で、家族は無事だったが、何人か連絡がまだとれていない友達がいるらしかった。彼女自身は地震直後に、家族や友達が心配だったために帰国したかったが、お母さんに止められたそうだ。「あなたが帰ってきても何も状況は変わらないんだから。逆に辛くなるだけでしょう。それならそっちでちゃんと学校に行って、自分に出来ることをしなさい。」一見冷たく聞こえるかもしれないが、わたしはそこに日本人らしさを見出した。どんな状況でも平常心を忘れない。自分の出来ることは何かを考える。感情に左右されずに理性で行動する。それから彼女は学校で募金活動をしたり、色々なボランティアに参加したりして、アメリカから出来ることを日々探しているようだった。

結局、この日本を襲った大災害が、皮肉にもわたしの中での契機となったように思う。まだまだ日本人も捨てたものではない。震災をきっかけに、そう思うようになった。日本人の美德は、真面目さ、助け合い、譲り合い、そして礼儀にあると思う。自分の感情よりも、優先させなければいけない時がたくさんある。時には冷たいと感じるかもしれない。しかしそのような結束力が、昔から大切にされてきた日本人の姿なのだ。今回の震災がなければ、それに気づかなかったかもしれない。海外でいなければ、それを今ほど実感することはなかったかもしれない。

ピンポンパンポーン。『本日は、日本航空をご利用いただき、誠にありがとうございました。またのご利用をお待ちしております。伊丹行き、ご接続の皆様は…』

ああ、帰ってきた、日本だ。ずらっと並んでお辞儀をするフライトアテンダントを見てそう思った。同じ髪型、同じ化粧をして、同じような微笑みを浮かべる彼女たち。個性がないと感じたこともあったが、今ではそれを誇りに思う。他のどんな国も真似できない。これこそが、日本人のあるべき姿なのだ。

優秀賞

夢からできた夢、

アメリカでのディベート部員生活

英米文学専修 四回生 隅野 友加里

“Are you interested in debate?” これが全ての始まりだった。私は去年、一年間アメリカのシアトルにある大学、Bellevue College にアメリカ文学を学ぶために留学していた。3ヶ月経て、アメリカ生活にも慣れ始めた頃、私はアメリカ文学に加え、国際経営学の授業も受講していた。その授業では世界規模で販売する商品を自分自身で考え、どのように製造、販売していくかを学期末にプレゼンテーションでクラスみんなに発表するという形態がとられていた。現地のアメリカ人の生徒たちと混じって、クラスの前でプレゼンテーションをするということは、英語が母国語ではない私にとってとても大変な作業ではあったが、それだからこそ内容を練りに練って濃いものにし、発表の仕方や話し方に注意を払って、自分なりに一生懸命発表した。授業の後にその授業の教授である Ms. Dennise が私の元にやってきて、さっきのセリフを急に私に言った。初めは訳が分からず、私はただただ黙っていた。しかし、聞くことによると、彼女は Bellevue College のディベート部の顧問をしていて、私のプレゼンテーションを聞き、私の英語の話し方がとてもディベートに向いているらしく、ディベート部に勧誘したいということだった。確かに私は声が大きく、留学生にしては英語を早く話することができる。限られた時間内にできるだけ多くのことを述べなければならず、周りを説得しなければならないディベートはどうやら私の話し方の特徴を活かせる場のような感じだった。私は特に何も考えず、せっかくだし新しいことにはどんどん挑戦していこうというただその一心でディベート部の入部を決意した。そこから私のアメリカでのディベート部員生活が始まった。

ディベート部のメンバーはアメリカ人 34 人、日本人 1 人で私は入部当初からとても苦勞する羽目となった。なぜなら、そのディベート部は私が想像していた以上に真剣なクラブで、部員のディベートにおけるレベルが高かったからだ。聞くことによると、アメリカではディベート部というものがとても有名で、ほとんどの中学校や高校にも存在している。そのため部員のほとんどが中学校または高校からずっ

とディベートに力を入れている経験者であった。私たちは週に一度、ディベートの練習を含んだミーティングを行っていた。そこでは顧問の Dennise がその日ごとにトピックを決め、適当にチームに分かれてディベートをした。アメリカのディベートにおける一般的なトピックはアメリカ政治についてだった。私がディベート部で初めて行ったディベートのトピックは「アメリカ政府はキューバとの外交を復活すべきだ」についてだった。ディベートでは基本的にまず政府側つまり賛成側、反対側に 2 対 2 で分かれる。賛成側のリーダーが 7 分話した後、反対側のリーダーが 8 分反論を述べ、賛成側のもう一人のメンバーが 8 分反論を述べ、反対側のもう一人のメンバーが 8 分反論を述べる。そして反対側のリーダーが 4 分まとめを述べ、賛成側のリーダーが 5 分まとめを述べる。最後に審査員が理由と共にどちらの勝利かを発表する。私はその時、賛成側のメンバーだった。反対側のリーダーに反論しなければならなかったのだが、ネイティブスピーカーのとても早い英語を聞き取ることができず、反論しようにもどうしようもなかった。与えられている 8 分間を使って話し続ける内容がなく、ただ同じことを繰り返していた。あれほど 8 分間という時間が長く感じられたことはなかった。そもそもキューバとの外交を復活することでどんなメリットがアメリカにあるのか、キューバは今どのような状況なのか、アメリカとキューバの関係はどのようなものなのか、そのような政治のことが全く分からず、そのために言うことがより一層見つからなかった。私は自分の英語能力の不足と政治の知識のなさをひしひしと実感した。私はディベート部に入部したことにとっても後悔した。ミーティングに出席することとても苦痛だった。ミーティングの際にはみんなの前でディベートを発表しなければならない。それは単なる自分の英語力のなさやアメリカ政治の無知を露わにするのみで、とても恥ずかしいものだった。週 1 回のミーティングに加え、3ヶ月に一度ほど北アメリカの大学のディベート部が集まって、大会が行われた。私もその大会に毎回、強制的に参加していた。大会会場でも、ほぼ全員が

ネイティブスピーカーであり、アジア人を発見することなどほとんどなかった。大会でも同じく私のディベートはとてもひどいものだった。毎回、審判はただ私が留学生にもかかわらず、ネイティブスピーカーに混じってディベートをしているというその勇氣と行動力のみは認めてくれたが、大会には負けてばかりだった。アメリカは広いということもあり、この大会は毎回2泊3日などの泊まりがけで行われた。正式な大学の部活ということもあり、全ての費用は大学から賄われ、その分私たちは大学側から結果を残すことを求められた。私は徐々に今のままではいけないという問題意識を持ち始めた。結果も残せずに、ただ大学の予算を使うことは私にとってとても心苦しかった。勿論、留学生だからという言い訳を用いることはできるが、そのことを理由にしくななかった。わざわざ目的を持って日本からやってきた留学生だからこそ努力して現地のアメリカ人と対等に戦いたいと思った。当初は退部することも考えたが、それは辛いことから逃げているだけにしかすぎないので、出来る限りの努力はしてこの課題に立ち向かっていこうと決心した。その頃、留学生生活も半分を過ぎ、ディベート大会は帰国までに残すところ1回となっていた。その大会に勝利することを目標として、私のディベートへの取り組みは変わった。

まず英語力の不足を補う唯一の方法はディベート内容を濃くして、自分たちの主張をしっかりと述べ、相手の主張に激しく反論することである。そのためにアメリカの政治の知識をつけることに力を入れた。毎日、アメリカで有名な全国紙である Wall Street Journal を大学の図書館で読み、インターネットを用いて政治の仕組みや政治そのものを勉強した。勉強すればするほど、今までの自分の無知に気づき、政治に興味を持ち始めた。そして英語力をつけるために大学でスピーチのクラスを受講した。日常会話の英語力は普段の生活のおかげでかなり身につけていたが、ディベートという状況では英語を論理的に話すということが求められる。その力を身につけるためにスピーチのクラスで練習を重ねた。さまざまな題材に対して論理的に順序を組み立て、説明していく。それは私にとってとても良い訓練だった。顧問の Dennise のところへ何度も足を運び、上達するにはどうすればよいかを話し合った。ディベート部のチームメンバーにも相談したりして、その頃から徐々に私たちは仲良くなってきた。私のためにチームメンバーで集まって、知識を与えてくれ、ディベート力を強化してくれたりもした。休みの日にはチームメンバーの家に遊びに行って、ホームパーティーなどにも参加した。そのおかげでディベート部のミーティングに行くことが楽しくなってきた。メンバーに会って色々な話をしたり、Dennise とディベート

以外のことで相談にのってもらったり、ディベートだけでなく、部活だからこそ仲間や楽しみができた。そんな中、帰国を目前にしてディベート大会が行われた。これが私にとってアメリカ最後のディベートになるのだと思うととても感慨深かった。トピックは「アメリカ政府はエジプトに対して政治的行動を行うべきである」についてで、私は賛成側だった。この大会は今年の2月に行われ、ちょうどエジプト政府が崩壊した時だった。いつものように私は新聞から知識を得ていたのでも、落ち着いて自分が言うべきことについて考えることができた。15分の準備時間が終了し、いざ私の最後のディベートが始まった。私は賛成側の主張として、エジプトの現状を伝えた上で、大国であるアメリカが混乱しているエジプトを政治的に導く必要があることを説いた。その方法として政治のリーダーである大統領をエジプト人による自由選挙で決める仕組み作りをするというものだった。エジプトでは長い間、自由選挙が行われていなかった。アメリカがエジプトの政治に首を突っ込みすぎるとそれはアメリカによる統治になってしまう。そうならないために、選挙の仕組みのみを作るという案を私は提示した。初めの頃はとても長いと感じていた8分が、とても短く感じた。自分で現状を理解した上で、考えた案だったので相手の反論にもうまく返すことができた。そしてディベートが終わり、審査員が口を開いた。「どちらも素晴らしい討論をありがとう。色々な点で考えさせてもらったけれど、今回は賛成側が勝ちだと僕は思う。」この時、私は嬉しくて涙が止まらなかった。相手側や審査員の前でただ1回のディベートに勝ただけで泣くことはとても恥ずかしかったけれども、その勝利は私にはとても大きな意味があった。これはこれまでのミーティングでの練習、大会を全て含めて正真正銘初めての勝利だった。

その大会から間もなく私は日本に帰国することになった。Dennise はいつでもこのディベート部に戻っておいでと言ってくれた。彼女との出会いが私の留学生生活を大きく変え、その変化は私にとって素晴らしいものだった。帰国前日にはチームメンバーが私に別れの言葉を言いに来てくれた。Dennise とチームメンバーには本当に感謝している。そして4月に私は1年間の留学を経て帰国した。今から私を待ち構えているのは就職活動である。私はこのディベート部での体験を通して、国際政治にとても興味を持つようになった。そして長年の夢だった留学は終わってしまったが、私には新たな夢ができた。それは新聞社の国際政治部門の記者になることである。これから大変な道のりだと思うが、辛い時はディベート部での日々を思い出し、新たな夢に向かって努力していきたい。

優秀賞

四年間の大学生活、次へのステップ

日本史学専修 四回生 森下 絵理香

私は昔から国際交流に興味があり、中学の時に初めてオーストラリアでホームステイを経験し、その後も高校で地元の自治体の姉妹都市交流の派遣事業に参加する等、海外に行く機会も多く、外国に対する憧れを漠然と抱いており、「外国人になりたい!」と思うほどでした。そんな私が、大学に入ってから、日本という国を見直し、日本の良さを再確認するきっかけとなり、また私自身の将来の職業への展望をもつことにもなった体験が、大学2年生の時にアメリカ・ワシントン州ポートタウンゼント市で参加したフィールドワークプログラムでした。

私がフィールドワークを外国でやってみようと思ったきっかけは、前年にアメリカ・シアトルにあるワシントン大学での短期留学で培った英語力がどこまで通用するか試してみたかったことと、ポートタウンゼント市の持つ独特な雰囲気に惹かれたことが挙げられます。ポートタウンゼント市内にはブルーの壁にえんじ色の屋根というムーミンの世界のようなかわいらしさや、レンガ造りの建物の外壁に昔の広告がペイントされたまま残っているレトロな雰囲気があり、他の所ではみられない独特さが魅力です。ポートタウンゼント市はオリンピック半島東端に位置する、シアトルから車で約2時間程度のところに位置し、人口8000人の小さな港町です。そのような小さな規模にも関わらず、アメリカ国内では人気の高い観光地で毎年多くの人が訪れます。平日に中心地のメインストリートを歩いているとほとんど人を見かけませんが、週末や休日になると人であふれます。さらに映画のロケ地にもなったことがあり、なぜ、このような小さな一港町がここまで発展しえたのか不思議に思い、ポートタウンゼント市における観光行政について調査しようと考えました。

調査の主な方法は聞き取り調査で、対象者はThe Port Townsend Main Street Programという観光協会、各商店、観光客です。観光協会は事前にアポを取っていたので問題はありませんでしたが、各商店や観光客へは街頭でインタビューをするという方法をとったので、依頼の仕方について試行錯誤しました。というのも、現地のアメリカ人から見れば私は「外国人」であり、いきなりインタビューの依頼をし

ても怪しまれると考えたので、まずあいさつから声をかけて簡単な会話をしてから、依頼しました。会話の糸口をつかむ方法として、犬を連れている人には「かわいいですね。名前は何ですか?」と聞いたり、観光客には「どこから来たのですか?」と質問する等、ほんの小さな話題作りを心掛けました。一般的にアメリカ人は日本人に比べると、見知らぬ人から声をかけられることに抵抗は少ないと頭ではわかっていても実際に自分が声をかけるとなると初めは戸惑いましたが、最後は難なく行えるようになりました。また、インタビュー内容についても質問は事前に考えておくことができますが、相手の回答を聞いてさらに深く掘り下げてさらに聞き出すことが必要であり、必死で相手の話にくらいつき、聞き取るよう努力しました。また、会話のテンポがナチュラルスピードで進むため、メモ等を取っている余裕もなく、頭の中に必死で記憶したり、インタビューを録音しておいて、後で書き起こすという作業も行いました。この体験から、ただ単に大学や語学学校で英語を勉強するだけではなかなか上達しにくい本当のネイティブとの「会話」というものをするのができ、リスニング力に加えて、相手の話に反応する瞬発力も身についたように思います。また、フレンドリーに相手に話しかけるということからも、度胸がつき、コミュニケーション力もアップしました。さらに、調査をするなかで、さまざまな人と親しくなることもできました。ポートタウンゼント市はオリンピック半島とカナダ・ヴィクトリア島に囲まれた地形で波が穏やかな港で、ポート産業が盛んであり、特に小さなポートに向いています。市内には若者が木のポートを作るためのポートスクールもあります。私は市内でセーリングをしている方にインタビューを依頼したことがきっかけで親しくなり、彼のボートに乗せてもらうことになりました。私にとってセーリングは初体験で、操縦もさせてもらい、とても楽しい経験ができました。他にも、ポートタウンゼント市にはギャラリーを併設したカフェが多く存在するため、コーヒー豆の卸会社もありました。その会社のオーナーともインタビューを通じて親しくなり、コーヒー豆をたくさんプレゼントしてもらいました。

調査を通じてわかったことは、ポートタウンゼント市は地域活性化や地域振興に力を入れて町全体で取り組んでいるということでした。ポートタウンゼント市がヴィクトリア調の独特な街並みを残すことになった理由として、シアトルの漁港としての発展、ノーザンパシフィック鉄道という新しい交通手段の発展と、ポートタウンゼント市の財政難により、開発の波に乗り遅れたことで町は荒廃の道をたどり、ついには1890年頃に財政破綻をしています。その結果、古い建物を解体することもできず、当時の建築物が残ったままとなりました。しかし、町ではそれらを保存し、新たにPRすることで観光客の集客に成功し、映画のロケ地にも選ばれるようになりました。元が取れるかどうかかわからないような新しい施設を作るのではなく、そこにあるものをうまく活かした地域活性化を目指しており、ポートタウンゼント市の産業のひとつであるポートもうまく取り込んでいます。毎年開かれるポートフェスティバルには国内から毎年約2万人が集まり、小さな港が無数のボートで埋め尽くされる様子は壮大でした。現在のポートタウンゼントは観光やポートフェスティバルのようなイベントで得た収入で成り立っているため、それらで得た収入が町の外に出で行かないような取り組みが行われています。その取り組みで一番効果が出ているのは企業や会社地域の中に入ってこないようにし、町の中だけでお金が回るようにする仕組みです。そのためポートタウンゼントの商店は95パーセントが個人経営であり、大型スーパーチェーンも郊外に一店舗あるのみで、多くの市民がファーマーズマーケットという、地元の人々が作った野菜や加工品を持ち寄る市場で買い物をしています。

この体験を通じて「地域活性化」「地域振興」というものに興味を持ちましたが、日本国内の自治体で行われている取り組みについてはほとんど知らないことにも気づきました。そこで、日本に帰ってきてから、自治体での地域振興の取り組みについて考えるようになりました。日本の自治体とポートタウンゼント市の共通点としては、古い町並みを活かした地域振興が行われている点が挙げられる一方で、町の中でお金をまわすための取り組みは目立つものがないように感じました。ファーマーズマーケットにあたるものとして、朝市がありますが、道の駅でやっているものも多く、地元の中でのスーパーの代わりというよりも、観光客に対しての市場というイメージが強いように思います。

「地域振興」や「地域の活性化」を考える上で、日本史学専修に所属していたことや大学コンソーシアムひょうごの学生委員をやっていたことでさらに地域振興を深く考える機会となりました。日本史学専

修において、地域にある歴史遺産を活用するための手段を考える内容の授業で、兵庫県朝来市生野へ行き、生野銀山地域の取り組みを知るきっかけになりました。生野では、古民家を再生し、観光客向けの情報発信スポットとして利用したり、銀山で働く炭鉱夫が食べていたハヤシライスを再現して販売したり、古い蔵を改装して銀山関連の展示を行ったりと、ポートタウンゼント市で見てきた、地域にあるものを活かした取り組みが行われていました。授業を通じて生野銀山地域の取り組みに強く関心を持ったので、専修の先生が行われている生野での史料調査に加わることにしました。現在は、生野の旧名家が所有する史料の整理に参加しながら、生野の町の取り組みについて実際に町を歩いたり、地元の方から話を聞いたりしています。これを通じて、日本の伝統ある街並みの魅力の再発見につながりました。

また、大学コンソーシアムの学生委員会では、留学生と兵庫県内の大学生が交流・学習できる企画をつくっていて、部門のチーフを務めました。「兵庫県の魅力を発信する」という目的の元で企画を作るため、兵庫県の各地の魅力について調べる良いきっかけとなりました。今までに、姫路、淡路島、豊岡、ルミナリエを紹介する企画を作ってきました。その中でも特に印象に残っているものが、姫路でのツアーです。ツアーは、姫路城観光と、姫路の特産品であるはりこの制作体験を行うもので、特にはりこの制作が留学生には楽しかったようです。現在ははりこの制作者は減少しており、継承者不足が問題となっています。地域の伝統の保護について留学生と意見交換したところ「はりこの制作は面白いから、興味をもつ外国人が他にもいると思う」「自分がはりこを持ち帰って自国で紹介する」「継承者は日本人に限らず、興味を持った外国人がやってもいいのでは」という、留学生だからこそ持つ視点から様々な意見を聞くことができました。留学生だから持てる複眼的な視野からの意見を聞くことで、私自身の視野も広がり、様々な方向から物事を考えることができるようになりました。

四年間の大学生活を通じて、体験してきたことを「楽しかった、勉強になった」というだけでは終わらせたくなく、次に活かしたいという気持ちが強くなりました。現在は今までの経験を通じて得た幅広い視野と、語学力を活かして、地域振興や地域発展に携わっていきたくと考えています。特に、日本の地域と外国の地域の国際交流を図ることで新たな地域振興の糸口になるのではないかと考えるようになりましたが、都市部における国際交流はとても盛んに行われていますが、地方の国際交流が進んでいるところは少ないです。そのことから日本の文化や習

慣・伝統に興味を持っている外国人との交流を通じた、地方における国際交流をサポートしたく、政策・立案に関わることでできる仕事をする事で地域を支えたいと考え、現在は将来のために政策や法律の勉強をしています。

優秀賞

人を理解すること、人とわかり合うこと

哲学専修 四回生 近石 墨

私は今年度で四回生になった。思い返せばさまざまな思い出が脳裏をよぎるが、感覚としてはやはり早かったなという印象だ。自分はここ神戸大学で何を学んだのか。何を知りそして経験してきたのか。『学生レポートコンテスト』のチラシが目にとまり、それを明確にしたいという衝動に駆られた。

私がこの大学を選んだ理由は偏差値だ。当時の私は向上心がやたら強く、高校も大学も自分が精一杯受験勉強をして入ることのできる学校を選んだ。たしかに聞こえはいいが、しかし本当は向上心ではなく自分と向き合うことを避けたかったのだと気付いた。

自分と向き合うという意味で大学一年の頃に悩んだことがある。私は中学高校とサッカー部に所属してきた。しかし今まで本当にサッカーがしたかったのだろうか、ただなんとなく続けてきただけではないのか、サッカーの他にもっとしたいことはなかったのか、と自問するようになった。大学でサッカー以外のサークルや部活を調べたがあまり興味がわかず、唯一しなかったことは本を読むことだった。私は日々黙々と本を読み続けたが、それが自分と向き合うことになるのかは疑問だった。

大学という場所は多彩な交友関係を築く可能性を秘めている半面、進んで人と関わろうとしない限り友人ができてにくいことを思い知らされた。高校では席が決まっていたりクラス対抗のイベントがあったり交友の場が当然のように用意されていた。しかし大学では席の指定も集団を意識できるイベントもなかった。サークルにも部活にも所属せず本ばかり読んでいた私は人と関わる機会が極端に少なく、大学に入り半年ほどろくに友達ができなかった。

授業中、隣には自分と同じ学年の生徒がいるのに私はその1、2メートルの距離に深い断絶を感じた。思い返せば自分は中学でも高校でも一人であることが多く、誰かから話しかけられることで友人の輪を広げてきたような気がした。私はこの時ようやく自分が「話しかけられるのを待つ人間」だったということを知った。

大学に行きたくない、授業に出たくない、一人で

昼休みを過ごしたくない。そんなことを毎日ぼやいていた。学校でも周りの学生の話声がすべて自分に対する罵詈雑言に聞こえ、いつも肩や手に力を入れながらイヤホンで音楽を聞いていた。

ようやく自分から人に声をかけられたのは体育の授業でのことだった。久しぶりに体を動かし興奮気味だった私はそこにいた人との断絶を越えてやろうという気持ちになっていた。思い切って話しかけると（当然であるが）自然に会話が続いた。会話のなかで相手の方も交友関係が育ちににくい状況に不安を感じていたことを知った。

私は他人を恋しく思いながらも嫌われることを極端に恐れていた。それは意識が自分にしか向いていなかったからだと思う。「話しかけられるのを待つ人間」である私は、誰からも話しかけられないことを勝手に自分が嫌われていることにすり替えていた。私は話しかけることに自分と同じような困難を抱えている相手の気持ちをまったく考えていなかった。そのことに気付くことのできた私には何人か気の置けない友人ができた。

大学で経験したこととしてさらに二つの授業のことについて記しておきたい。教養原論の『行為と規範』と応用倫理学の『倫理創生プロジェクト』だ。

『行為と規範』では世界各国の紛争を取り上げ実情把握や原因考察をした。そこで私は生まれて初めて本当に人が殺される映像を見た。チェチェン紛争のものだ。

事前説明を聞き逃したせいで紛争の理由や戦いの図式などはわからなかったが、彼らが着ている服、手に持っているもの、後ろ手の軽い拘束の他は顔や肌の色を見ても区別がつかなかった。印象的なのは彼らの表情だ。彼らはみな私がその日の朝電車で見かけたサラリーマンと同じ顔をしていた。武器を持たない市民五人、銃を持った兵隊四人。アーノルドシュワルツネガーが捕虜なら逃げるだろうが、映画のように派手なアクションシーンが起こる気配は微塵もなく、ただ兵士の固い靴が地面を鳴らす音が聞こえていた。

人気のない草原に連れていかれた被捕縛者は指定されたポイントで一列に並ばされる。銃を持った兵が適当に散らばり列の先頭に指示を出す。一人目が十メートルほど進むと服が弾けたように見え、支えを失った人形のように倒れる。二人目に指示がいく。十メートル歩くと同じように服が弾け、一人目と折り重なるように崩れ落ちる。三人目に指示がいく。彼らは最期まで取り乱さなかった。缶ビールのプルタブのように引き金を引き家に帰るサラリーマンのように歩いていた。私は列の一番後ろに並んでいる錯覚に吐き気がした。捕縛者は二人を残し、三体の仲間を近くの小屋へ運ばせた。運び終わった二人はそこで射殺された。

殺す人、殺される人、映像を撮影した人。私はひどく混乱し、自分と世界の間に深い断絶を感じた。

もう一つ特筆すべき授業、「倫理創生プロジェクト」ではクボタショックで有名なアスベスト被害者の遺族の方とお話をさせていただく機会があった。

私の班は娘さんを15年前に失くしたSさんという方にお話を伺った。亡くなられた当時、娘さんは30歳という若さだった。

Sさんは娘さんとの思い出を小さな頃から話してくださった。一人娘で、七五三では各所寺を巡り二日かかりだったそう。幼稚園の頃は三つ綱をわっかのように結えていたため帽子が傾き、Sさんが迎えに行くとすぐに見つけることが出来たこと、米米クラブと郷ひろみが好きになり追っかけ仲間と楽しそうに遊んでいたこと、流行に敏感で北海道ブームのときは何度も旅行に行っては話をしてくれたこと、本当に小さなことまでよく覚えていらっしやった。

最初の手術で「治療は難しい」と言われた。腹部に直接抗がん剤を振りかけてもらったそう。

アスベストによって引き起こされる中皮腫という病気は肺が固くなって収縮しづらくなる病気だ。患者はストローで息をしているような苦しさが生涯続く。発症までは比較的不調を感じずにいられるそうだが、発症すれば一年足らずで亡くなることが多い。

娘さんの症状はまだ大綱という部分の癌にとどまった。手術後もあまり不調を感じなかった娘さんは「抗がん剤が効かないから私は癌じゃない」と言っていたそう。そこに希望を置いていた、と。

娘さんが職場で出会った男性の話も伺った。誠実な方で、通院の際はいつも迎えに来ていたそう。「将来を考えた付き合いだったんじゃないかと思う」共に歩む未来も娘さんの病状が悪化するにつれ次第に消えていった。

サリン事件の頃、娘さんは二度目の開腹手術をした。手術を終えた医者はSさんにこんもりと紙の上

に乗った黒ずんだ肉の塊を見せ「この倍は捨てました」と言ったそう。数ヵ月後、脳卒中で父親が亡くなり、入院していた娘さんは死に目に会えず葬式にも出られず布団にくるまって泣いていたそう。

いよいよ状態が悪化した娘さんに医師が「入院しますか、帰りますか」と尋ねると、娘さんは「帰りたい」と答えたそう。「家にいたい」と。自宅療養中、Sさんが娘さんの口に細かく砕いた氷をいれてやるとカリカリと音を立てて食べていたが、しばらくすると口の端からつと血が流れ、娘さんは救急車で病院に搬送された。

人は最期のときまで聴覚だけは残っていると聞きSさんは娘さんの名前を呼び続けた。名を呼ばれる度に少しだけ顔を動かしていた。「うまれてきてくれて、ありがとね」Sさんが娘さんに語りかけると隣にいた看護師に止められたそう。「そんなこと言っちゃだめです。最期まで励ましてあげてください」

Sさんは娘さんの死後、NPO法人「ひょうご労働安全衛生センター」に属す「アスベスト患者と家族の会」で同じようにアスベストの被害にあわれた方々の支えになっている。「支えるし、支えられている。同じことを体験した者同士、自己紹介もせずに話ができるし、親密な関係になれる。心がすっと楽になる」Sさんはそうおっしゃっていた。

「この病気の潜伏期間って20～50年もあるでしょ？　じゃあ私の娘の人生は蝕まれるだけだったのかって思っていたときもありました」私はここでも断絶を感じた。

しかし、今の私がこれらのことを振り返ったとき感じるのは彼らとの断絶だけではない。それは「この断絶が人を導くのではないか」ということだ。

同じ大学生との断絶を感じることで意識を内から外へと向けることができた。チェチェン紛争の惨劇の映像が、怠惰に浸っているこの日常が絶対に守らなければならない幸福であることに気付かせてくれた。倫理創生プロジェクトで出会ったSさんとの断絶を感じ、社会の発展の影で深い悲しみを担わされる人を知り、抗いようもなく大切なものを奪われた人に会い、同じように悲しむ人の助けになろうと活動する人の話を聞いた。そこから私は人の力になれるような仕事に就こうと決心した。

今、自分は何かを学んで、知識を吸収して、成長しとる思てるかもしれないけど、本当はな、成長した気になってるだけなんや。ええか？　知識を頭に入れるだけでは人間は絶対に変われへん。人間が変われるのは、『立って、何かをした時だけ』や。

(『夢をかなえるゾウ』水野敬也著、飛鳥新社)

——確かにその通りだと思う。ただ一つだけ付け加えたとすると、自分にとって真に重要な知識や経験とは、それを知り経験するまさにそのことによって我々を行動に駆り立てるだけの力があるということだ。我々はそれを必要としているのであり、いつどこで何を必要とするかにこそその人の本質というものが秘められているのではないか。

人を理解すること、人とわかり合うこと。私は他者との間に横たわる深遠な淵に引き込まれた。その淵の中で私が本当に必要としているものに出会い、知り、そして経験した。そして私は私を変えるよう突き動かされた。

私にとって大学とは本当の自分に向き合うための場だった。残りの大学生活、そして卒業後の人生においても自分を掘り下げていきたいと考えている。

佳 作

クリエイティブな毎日

英米文学専修 二回生 姉川 拓生

私は劇を作っています。脚本を書き、舞台美術を作り、演出をし、照明・音響等すべて手作りで一つの作品を作ります。夏休みには兵庫県北部まで合宿に行き、豊岡・城崎・香住を巡回し、その人たちに笑顔を届けることが目下の使命です。

などと大それたことを書きましたが、作っているのは子ども向けの劇、いわゆる児童劇で、内容は極めて単純な勧善懲悪ハッピーエンドもの。ゴミだらけの公園がきれいになる話、ひねくれたサンタさんが家に来る話、文化祭でヒーロー劇をする話など、おもに小学生を対象として、笑えながらも少しだけ教訓を取り入れたものがほとんどです。メンバーはたったの五人。その中でも演劇経験者は三回生の先輩ただ一人。全員で役者・演出・裏方すべてを兼ね、なんとか切り盛りしている状況です。活動は年間三シーズン制で、毎回新しい劇を作ります。春はゴールデンウィークに大学のキャンパスを借り切って子どもたちに遊びに来てもらう「春の子ども大会」に向けて、夏は先ほどの合宿に向けて、秋はクリスマス公演に向けて、日々活動しています。

この夏は、私の書いた脚本で劇を作っています。役者としても少しだけ登場しますが、基本的には演出に徹しています。演出は、二回生になって初めて出来るもので、脚本の世界観を役者に表現してもらうのが仕事です。セリフの感情の込め方から、振付け、舞台の使い方など、見てくれる子どもたちに楽しんでもらうことを第一として考えています。さらに新入生への演技指導も大きな仕事です。今年は二人入ってくれましたが、もちろん初心者です。同じく初心者である私になにができるのでしょうか。発声、ストップピング、スローモーション、感情表現、エアロビクスなど、先輩から教わったものだけでなく独自のものができないか、常々考えています。

一年間活動してきたとはいえ、演劇初心者の私としては日々悪戦苦闘してばかりです。大学まではずっと野球ばかりしてきたという体育会ぶり。ハッキリ言って演劇の経験など、文化祭でふざけた役（サザエさんのパロディで、なぜかプロレスへと発展するもの）をやったことくらいしかありません。それも勢いとテンションで乗り切ったものです。真面目にやった記憶はありません。なので、実績など皆無です。大学での一年で学んだことを精一杯発揮しているつもりですが、演出としての力不足はどうしようもあ

りません。

どうすればわかりやすく表現できるか、感情の流れはおかしくないか、ストーリーに矛盾はないか。最近の子どもたちは目が肥えてきているので（豊岡の子どもたちは神戸の子どもたちよりも純粹です。偏見かもしれませんが、向こうには夏休みの楽しみが限られていて、私たちの公演を心待ちにしてくれているからかもしれません。宝塚や四季劇場がすぐ近くにあるこちらとは環境が違います）、一笑に付されてしまうことも多々あります。子どもだからといって、手を抜くことはできません。笑ってほしいところでまったく笑ってもらえなかったり、シリアスなシーンで逆に笑われてしまったりなど、うまくいかないことがほとんどです。先輩の演出でもそのようなことがあるのに、私の演出ではいったいどうなってしまうのか、不安でいっぱいです。

なぜ自ら困難に飛び込むのか、疑問に思う人もいるかもしれません。これ以上ストレスの源を増やしてどうするのか、大学だけで十分忙しいのに、と。確かに、負担が多いのは否めません。授業が終わったら部活、それがなければアルバイト。家には寝るために帰るだけになりつつあります。学生の本分はもちろん学業なので、それもおろそかにはしません。自分の娯楽のために単位を落とすなど、あってはならないことです。そんなさまざまな精神的負担によって、私が「電池切れ」と称している状態になることもあります。そうすると、人と顔を合わせるのが嫌になり、何事にも気分が高揚せず、とげとげしい態度をとるになってしまいます。毎日気を張ってばかりいると、その揺り戻しが来ることは避けられませんが、二回生になって初めて電池切れを起こしました。先輩になるという立場上の気苦労がたたったようです。結果、回復（充電？）するまで、周りの人たち、特に先輩にはたくさんの迷惑をかけてしまいました。

さらに、部活動というのは共同体である以上、容赦のない実力勝負の場です。人間性がもろに現れ、表向きを装ってはいても、裏では決して美しくはない人間観察が行われています。学力など関係ありません。能力や個性がぶつかりあい、対人関係で気疲れを起こすこともしばしばです。自分が歯車の一部でしかなく、伝統という潤滑油で回されているだけなのではないか、と思うこともあります。

それでも私は、毎日が楽しくて仕方ありません。困難であればあるほど、達成するまでの楽しみは増していきます。部活動に夢中になったり、対外交渉で打ち合わせをしたり、視察に行ったり、二回生になって授業がさらに忙しくなったりなどで下宿に一人でいる時間は減っていく一方ですが、ときどき、一人の時間がとれてぼんやりしているときなどに、ふとこう思うのです。こんな狭い部屋の机上から、一つの劇が生まれ、子どもたちに笑顔を届ける。なんて素晴らしいことなのだろうか、と。

脚本は、書いている間は自己満足です。出来上がった後、みんなで読みあい、投票をして、実際にやる劇を決めます。自分が楽しんで書いたものが劇として作り上げられていくことはこの上ない喜びでした。自分の価値観に他人が共感してくれるという感動と、自分の作品が認められ、評価されたことへのうれしさに胸がいっぱいになりました。しかも、それを子どもたちが楽しみに待っていてくれるのです。気合が入らないはずがありません。

英米文学専修に進んだのも、現代演劇が学べるところにひかれたからです。シェイクスピアの悲・喜・問題劇やオスカー・ワイルドのエログロな社会批判劇、ベケットの理不尽劇、T.S. エリオットの宗教的作品など、泣く子も黙る大文人たちの作品に私たちのものが並ぶはずありませんが、というか名前を挙げるだけでも恐れ多いほどなのですが、彼らもまた、何かを伝えようとして、作品を発表し続けたのです。児童劇に取り入れられるかどうかは別として、作品にはかならずテーマがあります。わかりやすいものもあれば、わざとわかりにくくされているものもあります。また、巧みなセリフ回しや笑いを誘うクレイジーな滑稽さなどは、本当にいい勉強になります。それら多くの技巧を盛り込んだ作品は、時代は違っても、一人の人間の手から生まれたものです。彼らが何を考えて作品を書いたのかを学ぶことは、そのまま私の小さな作家魂を刺激します（恐れ多いですけど）。

考えることや学ぶべきことがたくさんあるというのは大変なだけではなく、日々が充実していることでもあります。気がつくとも半年間実家に帰っていませんでした（両親と祖父母には心配をかけてばかりです。夏休みには精一杯孝行しようと思っています）。時間の経ち方が、高校の時とはまったく違います。高校生のうちは、学校の先生に示してもらった道筋を辿るだけという受け身の状態がほとんどでした。みんながそうしているからそうする、なんとなく周りに流される毎日。ルーティンワークのような変わり映えのない日々。与えられた課題をこなしていればどうにかかりました。しかし今は、自ら選び、決

めることがほとんどです。周りのだれかに任せても大丈夫なんて思っていないかもしれません。自分のことは自分で決める。あたりまえなことですが、これほど大変なことはありません。一人暮らしを始めたからかもしれませんが、一人の時間が増え、必然的に自分との対話の時間が増えました。そんな時間のおかげで、今までのようになんとなく周りに流されることも少なくなり、「自分」をしっかりと自覚して行動できるようになりました。これも、大人に近づいたということだろうかと考えてみると、くすぐったいような気持ちになります。

大学は、貴重な「時間」を提供してくれます。時は金なり、という言葉は時に対して失礼です。いくらお金を積んでも、時間を買うことはできません。自分だけの時間、自分だけの空間を、私は大切にしています。

今過ごしている日々は、いわば毎日が創造、クリエイティブの連続だといえます。部活動はもちろん、授業でのレジュメやレポートの作成、さらにはアルバイトであっても自分の選択によるものだとすればクリエイティブです。これから私は、引退までは、作品を作り続けるでしょう。できれば引退してからも、受け身な人間に戻るのではなく、クリエイティブであり続けたいと願っています。自分の手で、ゼロからものを生み出す。もちろん大変な労力を伴うものですが、若さとエネルギーに満ち溢れた今だからできることです。私たちの力は無限の可能性を秘めています。それを無為にしてしまうのは非常にもったいないことです。ここ、神戸の地から、県へ、日本へ、さらには世界へと、道を切り開くのは私たちなのです。

佳 作

少年老い易く 学成り難し

人文学科 一回生 酒井 友樹

私は22歳の大学1年生である。なぜこの年齢でこの大学のこの学部に入ろうと思いついたか、私事であるが順を追って述べたい。

16歳の私は希望の高校に入学出来たにも関わらず、勉強に対して無気力に陥っていた。授業も全く頭に入らなくなり、学校に通うことが嫌になっていた。

それまで公立の小中学校に通い、進学塾にも行ったことのなかった私は、井の中の蛙に等しく、初めて経験する進学校の雰囲気に耐えられなかった。同級生の誰もが自分より賢く見え、それまで経験したことの無い劣等感に苛まれた。

さらに、2002年に開始した総合的な学習や週休2日制などの「ゆとり教育」によって、解の公式さえも知らずに入学した私には、高校の内容は極端に難しくなったように感じられた。義務教育の内容が30%も削減されていることに、現場が対応しきれていないのが実態ではないか。実際の生徒の知識と、教員の考える「これくらいは知っていて当たり前」の溝が埋められていないように思う。私は定期試験で最下位になることもしばしばであり、逃げるように部活に打ち込んでいた。

そして、周囲に少しずつ受験ムードが漂い出した2006年の秋、所謂「未履修問題」が発覚した。高校側が大学受験と無関係な必修教科の授業を省いたことによって、多くの生徒が卒業単位不足であることが、全国で次々と明らかになったのだ。友人の高校では責任を感じた校長が自殺するなど、当事者にとっては深刻な事態だった。

私の高校では「情報A」と「理科総合B」が未履修とされた。私の学年は救済処置もなく、70単位時間の補習授業が休日や放課後返上で行われた。

連日の報道でのマスコミの主な意見は、有名大学の合格者を増やすために学校ぐるみで「ずる」をしている、というものだった。しかし、そもそも学習指導要領を制定した文部省に落ち度はないのか。「総合的な学習」や「情報」など教える内容は多くなったのに、逆に週休2日制で授業時間数は減った。また「理科総合A・B」など多くの大学では入試で使えない科目が必修になった。一方で大学受験の入試科

目や難易度に変化はない。そうした制度の不整合によって、起こるべくして起こった問題ではないのか。単に高校側の責任として、結果的に生徒に苦勞を強いたことは、何の解決にもならなかったと思う。

こうして私は自業自得とは言え、勉強の遅れを取り戻せないまま、入試当日を迎えた。結果は当然不合格。同じ条件で合格した友人もいるのだから、3年間こつこつ勉強しなかった自分の結果を受け止めるしかなかった。

やむなく浪人することになったのだが、ここでも過ちを犯してしまう。高校の内容が基礎から分からないにも関わらず、予備校で最も難しいコースを選択してしまった。当然レベルが高く、授業もさっぱり分からないまま半年が過ぎた。そこで漸く焦り始めたのだが、遂には予備校にも行けない事態に陥ってしまう。

12月初旬の凍てつくような寒い朝、私はいつもの電車に乗ろうと、駅まで走っていた。電車には間に合ったが、席につくとこれまで経験したことの無い、引き裂かれるような胸の痛みに襲われた。続いて呼吸が苦しくなり、助けを求めようにも声が出せないほどになった。救急車を呼ぼうかとも思ったが、時間と共にやや症状が改善したので、その日は自力で家に引き返した。

疲れが出たのだろうと思い、安静にしていたのだが、やはりどうもおかしい。左の胸に違和感がある。そこで、夕方になって近所の開業医に行った。最初はただの筋肉痛などと言われたが、念のために撮ったレントゲンで、左の肺に穴が開いていることが分かった。大きな病院を紹介するから週明けに行ってくれ、とその開業医に言われたので、その通り月曜日まで待って赤十字病院に行くと、即刻入院することになった。どうしてもっと早く来させなかったのか、と赤十字の医師は呆れていた。

病名は自然気胸で、私は体質的に肺に穴が開きやすいのだそうだ。体力的、精神的な無理もあったのかもしれない。

時間の経過と共に、肺から漏れ出した空気が体内に溜まって内臓を圧迫していた。そこで、左胸に穴を開けてホースを刺し込み、体内の空気を吸い出す

処置がとられた。

太い管を刺したまま過ごす1週間は何か月にも思えるほど長かった。胸にナイフが突き刺さっているも同然の痛みで、夜も殆ど眠れなかった。夜の病院が怖いというのは健康な人間の考えで、私にあるのは現実的な痛みだけだった。生まれて初めて、自分が存在しているだけで辛いと思った。

この入院で、見えていても、見ていないものが多いと知った。暫くは歩くこともままならず車椅子で過ごしたのだが、例えばエレベーターの中の大きな鏡は、車椅子が後ろ向きに出るためにあるのだと分かった。また、身障者用トイレの使い易さも実感した。もしかして私は、これまで多くのことを見落としてきたのかもしれない。

入院したことのある人が、不思議と口をそろえて言うことがある。それは「自分よりも、もっと辛い病気の人がいる」ということだ。生まれてからずっと病院から出ることの出来ない人や、治る見込みのない病を抱える人は大勢いる。では、私たちのしている様々な競争はいったい何なのか。私たちに平等な機会など決して与えられてはいないのだ。社会のシステムは、健康で裕福な人間のためにあるのだと思知らされた。競争を制して支配するのは強者だから、強者に都合の良い社会が出来るのは当然だ。その頃大きく報じられていた派遣労働者の大量解雇のニュースを病院のベッドの上で眺めながら、そんなことを考えていた。

そして、漸く退院の日がきた。入試が近いので本格的な手術は断った。再発の可能性が2分の1と言われて恐ろしかった。傷口がなかなか塞がらず、その後も毎日のように通院した。予備校にも復帰出来ないまま、あつという間にセンター試験当日を迎えた。友人たちは緊張と興奮が入り混じったような雰囲気だったが、対照的に鉛筆を握るのも久々な私は茫然自失としていた。ぼんやりしているうちに2日間の試験が終わり、何点満点とも分からない悲惨な結果となった。絶望しなくては希望は持たない方が良くと思った。そして周囲の人の言葉の端々から、他人はいつも結果しか見ていないのだと気付かされた。

そんな時知ったのが、大阪市立大学法学部の夜間部が、その年で最後の募集だということだ。半ば諦めかけていたが、出願するなら少しでも可能性のある所をと思い受験し、奇跡的にも合格した。

実はそこへの進学に当初は前向きではなかった。だが両親に「もう受験勉強はするな」と言われ、初めて私は家族も限界だったことに気付いた。物心ついた頃から家族の口癖は「勉強しろ」であり、私にとって勉強は兵役のようなものだったので、「するな」と

言われたことはまさに天変地異だった。その時初めて、勉強とはしたくても出来ない時が訪れるのだと悟り、高校時代に勉強から逃避していたことを心から後悔した。よく大人が「子供の頃に、もっと勉強しておけば良かった」と言う意味が分かるような気がした。

私の決意は固まらないままだったが、周囲の後押しで市大への進学が決まった。夜間に通うのは働くサラリーマンばかりかと思ったが、入学してみると意外にも同年代の学生が殆どで、皆が様々な境遇で集まって来ていた。他では出会えていなかっただろう、個性的な友人とも出会えた。大学の自由な雰囲気刺激を受け、サークル活動も始め、表面的には順調だった。

しかしその実、大学受験には失敗したという劣等感が心の奥底にあった。不完全燃焼に終わってしまったことで、くすぶった気持ちが残ったままだった。友人の前では明るく振る舞っていたが、一人になると自分への不満と苛立ちで一杯になる毎日だった。他の友人たちが私より、はるかに決意を持って入学していると感じずにはいられなかった。私は一生後悔し続けなければならないのかと、暗澹たる気持ちだった。次第に昼夜逆転した生活になり、学業も疎かになっていった。精神的な落ち込みも激しく、このままでは自らの重圧に押し潰されそうだった。私が私らしくあるためには、克己しなければならないと思った。自分に克つためには、他人に大きく後れを取ったとしても仕方ない、と心を決めた。

そして2年生の春、一人で再び受験勉強を始めた。高校の教科書や、手付かずだった通信添削を、全て基礎からやり直した。なぜ神戸大学を受けようと思ったのかと言うと、高校時代の憧れの先輩や尊敬すべき友人が多く入った大学であり、入試問題も偏りのない基本的な良問ばかりだったからだ。

誰とも会わずにひたすら机に向かい続ける気の狂いそうな日々だった。1年近くも孤独と向き合い、精神的に限界に近かったが、耐えることができたのは、両親の支えや励ましてくれた友人のおかげである。合格通知を手にした時は、安堵に近い気持ちだった。

ではなぜ、文学部を選んだのかということだ。小さい頃から正義感の強かった私は、何か社会の役に立ちたい、社会の矛盾を無くしたいという気持ちが強かった。だが、その社会を構成しているのは個々の人間だ。若々しい理想だけでは通用しないだろう。自己に矛盾を抱えた人間がつくる社会が、矛盾に満ちたものになるのは当然だからだ。人間を突き動かすのは決して理屈などではなく、感情やしがらみだ。自分の経験からも、人間が分かっているのに痛感し

た私は、法律や制度以前に、まずは人間を知る必要があると思った。そのように考えれば、文学部は最も社会の役に立つ学部だ。学問の基礎である文学や哲学は人間の根本を問うている。

他人より、やや遠回りをしてしまった。当然、真っ直ぐ歩んで来た人たちの方が偉いのだから、自分のことを書くのは恥さらしになるだけではないかと最後まで迷った。しかし、この数年間の瞑想は決して私が不真面目だったから生じたのではない。真剣そのものでその時々には苦悩した結果なのだ。人は真剣であればあるほど、喜劇や悲劇を招くのかもしれない。

これを読んで、同情する人もいれば、苦笑する人もいるだろう。受け取り方は様々だろうが、私はごくありふれた話だと思うのだ。なぜなら、当たり前に生きることほど困難なことはないからだ。3月11日の東日本大震災からも改めてそれを実感した。不条理な出来事もまた、当たり前起きるのだ。しかし同時に、人はどんな状況でも前向きに生き抜く強さを持っている。これほどまでに復興したこの神戸の街のように、東北が元に戻る日が必ず来るはずだと信じている。

私は今学問ができることの有り難さを忘れずに、何事にも真摯に取り組みたい。そして、自己の利益や名声のためでなく、私を必要としてくれる誰かのために働きたいと思っている。

審査委員長特別賞

今、自然とは

フランス文学専修 一回生 日比野 有真

大学入学から昨年度の終わりまでの3年の間、ぼくがこの身を休めていたマンションの一室は、阪急王子公園からほど近いところにありました。阪急王子公園といえばごぞんじ阪急六甲から西に一駅のところにある駅です。僕は3年という短くない月日を費やしてこの街を愛するようになったので、少しこの街を紹介しようと思います。

我が隣人の多くはうら若き女性で、毎夜遅くまで華やいだ声が聞こえてきましたし、ときにはみだらな物音が漏れ聞こえてくることもあり、そんな時ぼくは音楽をかけて部屋の反対側の端っこに逃げ、もじもじとやり過ごしていました。駅に近く誰もが気軽に訪ねられる立地ですし、オートロックでプライベートも保障されているなど、年若いぼくや彼女らにとっては至れり尽くせりの空間だったのです。外に出ると穏やかな住宅が並び、小学生や幼稚園児がはしゃぎ回る声を別にすれば、人は横目で植木に水をあげ、庭先を掃除し、犬を引きつれてのしのしと散歩をしながら、永遠に続きそうな平穏を享受しているのです。すぐ近くにある公園にはいつもカラフルな花が咲いていますし、毎朝正体の知れない何者かの手によって、キューピット像の手にみずみずしい花が握らされていました。ときおり野良猫たちが赤ん坊のようにかわいい声でささやきながら、餌をねだりに寄ってきてぼくの脚にほおずりをしたりするときには、思わず感動してぎゅっと抱きしめられずにはいられません。そんなとき、自分の外聞にたいする一種の無関心のうちに、いさぎよい美德を感じることができ嬉しくなりました。誰もが厭う悪臭もめったに人の鼻を悩ますことはありませんでした。すこし南に下ると水道筋商店街があって、仏壇からおむつに至るまでのあらゆる生活必需品がここで揃います。人々はスーパーマルハチを基点に、思い思いの品を求めてねり歩いています。ありふれたチェーン店ではない、庶民的な舌を満足させる個人店が数多くあり、外食をする時にはどの店に行くか思いあぐねる羽目になりました。

ぼくが王子近辺で何にもまして好んだ場所は王子動物園です。ぼくの少ない経験から判断するに、動物園というのはとても素敵なデートスポットの一つに数えられます。動物たちが自由気ままに表現している野生の血は、人がふだん理性でもって抑えてい

る本能にダイレクトに媚びてくるようなのです。キリンはいつ止むとも知れぬ八の字を描き続けるあやしげな舌つかいで鉄柵をペロペロ舐めまわしています。カンガルーたちは四六時中その身を怠惰にゆだねて仰向けに寝転んでいるのですが、彼らの金玉の大きさときたら、どんな女の子でも目が離せなくなるようなシロモノでした。像の糞はやはりポリウム満点の悪臭プンプンたるもので、笑いを誘わずにはおきません。ぼくにとって驚いている人の横顔を見るのはこの上なく愉快でした。そうして眺めながら、彼女らにもどうやら野生の血を隠し持っているんじゃないか、との思いを新たにするのでした。そんな愉快な動物園のある王子公園の近辺は、多くの人がこれ以上ない生活環境のなかで暮らせる、古き良き居住空間と言って差し支えないところでした。「人間の本質はあらゆる資源を無差別に精進しつくすことにある」とジョルジュ・バタイユが言っていたとしても、今、この幸せな街を堪えず実現しつづけるためにそれが必要ならば、喜んで自分という資源をむだづかいするのも悪くありません。フリードリヒ・ニーチェが「終わりの人々」と言って痛烈に非難したような安住する奴隷たちにぼくがびたりと当てはまるとしても、それがなんだというのでしょうか。というのもこれ以上高望みすることはエゴのように思えるのです。「貴族制を復活させるとか、人間には闘争が必要だとか、この街に住んでいたらあなたもそこまで言わなかったでしょうよ」そう言ってぼくはニーチェに喰ってかかるのです。3年間住んでいるうちに、ぼくはこの街を深く愛するようになりましたし、この街は匿名の愛によって育まれた平穏のように思われます。

街暮らしに今ではすっかり慣れましたが、ぼくの生来の気質は、千山万水の自然に囲まれた岐阜県の小さな町で培われました。

うちの地元では人工物よりもずっと完成された自然がいまだに権力をふるっています。確かに15年ほど前と比べれば居住区の近くは木々が減っていて、ぼくの耳には鳥やカエルや虫たちがその泣き声のうちに静かに悲しみをにじませているように思えるのですが、それでも今なお四方を山に囲まれ、大きな河川に貫かれた自然の町でありつづけています。夏

になると築六〇年の我が家の軒下にはツバメたちが巣を作り、その雛ときたら始終フンをまき散らしているし、今ごろは庭先の池で、ボーフラ達が一刻も早く蚊にならんとしてくねくねといじらしく身をよじらせているはずです。田んぼは郁郁青青とした稲で蔽われており、幼いころに数限りなく捕まえたにもかかわらずどうしても全滅するには至らなかったザリガニたちが、ぼくという天敵のいない田んぼで数を増やしていると思います。それにしても6才の時にはかんたんに捕まえることができたザリガニを、22歳の今となってはどうしても捕まえることができません。奴らの赤黒いハサミにつかれて血を流すのが怖くて仕方がないですし、不用意に力を込めれば殺してしまうように思われて無意識のうちにブレーキをかけてしまいます。とくに、盛りあがった糞便のような巣に手を突っ込むのに抵抗を感じると、ぼくはとうの昔にフロイトの言う糞便期を永久に卒業してしまったのだろーと考えさせられて、故郷にいながらにして郷愁を感じるような不思議な現象に出くわすことになりました。

山から流れてくる水はあまりに冷たくて、気温が38度ある猛暑日でも人の熱を一瞬で奪っていきます。ぼくは年に一度アユを捕まえるためにウェットスーツを着込み、モリとゴーグルをひっさげて川に突撃するのですが、水から上がる頃には唇はすっかり紫色になっています。串刺しにされたアユが焚火のまわりに円形にめぐらされたあたりで一時間は暖を取らないといけないほどです。ちりぢりになっていた親族が集まってきて、真夏のバーベキューで親交を深めています。そしてその日のうちに一年分のアユを食いだめしてしまうので、その後一年はみんな、アユを食べずに我慢することになりました。

ぼくの実家は幾世代か前から農家をしていて竹林や田んぼに恵まれ、今は使われていませんが豚小屋や鶏小屋などを所有しています。春には3日に一度、竹林に出歩いて巨大になりすぎたタケノコどもを蹴り倒し、程よい大きさのたけのこを自宅用に丁寧に切り出し、奇形のたけのこを近所に配る用に刈り取ります。帰りには母親と一緒に、子宮の内側を思い起こさせるようなくすぐったい木漏れ日の山道を歩きながら、あやしい渦巻き模様で目を楽しませてくれるゼンマイやワラビを摘んで、卵とじ用にツクシを取り、ゆたかな山の恵みに感謝しました。これらの習慣は長年くりかえし続けられてきたもので、今やぼくの心中にも深く根を下ろし、ぼくのどんな心持も思想も、これら幼少期から続く体験をもとに変奏されていると感じられるほどです。

阪急王子公園から北に10分ほど歩くと、摩耶山

の登山口に出くわします。街の喧騒を避けて背筋を伸ばしたときは、よく森林浴に出かけたものでした。このタイプの山登りの極意はといえば、頭をからっぽにして、散々歩きまわってくたくなった気分で臨むことにあります。そうして山に入ると、不思議と疲れを感じることも少ないですし、自然をけだるく感じる五感が、日常的な思考をどこか心の隅に追いやってくれます。頂上付近まで登るとかつて栄えた城の跡地があり、さらにジャンダルムの脇を歩いていると、雑草におおわれた社のなかで年老いたお地藏さまが、いまなおわずかな信仰の跡をとどめています。腐るほどある宗教のなかでぼくが愛するのはただひとつ、このお地藏さまが讃えているえも言われぬ雰囲気であって、町にあるきれいなチャペルとか、豪華な仏壇などによって感慨をえたということは一度もありませんでした。

ぼくは神戸の街を一望することのできるこじんまりした高台の上に立ち、自分の住む街を見下ろします。そうすると、自然のもとにどっかりと腰をおろしているぼくの生来の気性と、街を大切に思う気持ちとが、たがいに視線を合わせないように気遣いつつ向き合っているのが感じられそうになります。背後から、ぼくの自然志向の気性はこう言いたいようです。「自然というのはどんな人の営みよりすばらしいよ。お前はこの自然の高台に立って、あらゆる人を見下すことのできる素晴らしい視点をもったと感じていることだろう。お前の自然をめぐる心は、お前が街を愛する心よりもずっと色彩豊かで美しいものだとお前も気づいているはずだ。この自然への思いをもち続けなければ、取り返しのつかない凡夫になってしまうぞ」と。しかし一方で山の下から、ぼくの住み慣れた街はこう言っているようです。「おい、お前はこの愛すべき街の維持に貢献しなくちゃならないぞ。それは親孝行にも似た恩返しなのだから。いつまでそうやって自然にしがみついているのだ？ お前の自然はすでに取り返しのつかない過去のものになっていて、お前が悦に浸っているそのひねくれた視点とやらはお前の脚を引っ張ることしかできやしない。早くその未熟さに見切りをつけて、この街に正式に参加しなくちゃいけない」——そうしてどちらの言い分にも一理あると思えばぐねながら、ぼくは自分の立ち位置に確信が持てずにいます。いずれこのいがみ合いにも折り合いを付けねばなりません。